

○靈雲院〔不二菴と号す、湘雪和尚の住房なり〕遺愛石〔当院庭中にあり。相伝ふ、此名石初は肥後大守細川光尚侯の持物なり。曾て湘雪和尚細川家にちなみて後にこゝに住す。其時大守より寺産五百石を与へんと命じ給ふ。湘雪拝謝して云、出家の後祿の貴は参禪の邪鬼なり、願くばこれに換て庭上の奇石を賜らば寺宝とすべしと乞ふ。因レ茲銘を遺愛石と号し、こゝに贈り給ふ。高さ三尺横四尺、岩頭に小松卷柏を樹る、石肌細やかにして色青し、台に石刻の須弥壇なる物あつて、其上に石槽をすへ、其中にあり、無双の名石なり。諸名家の記文あり、軸物両卷に満る、初卷の二三をここに挙る〕

朝鮮竹堂詩

积文

君不^ヤ見、蓬萊之山在^ニ海中、靈秀之氣鐘^ル異石、水嚼^テ苔蝕^ス千年余、峯巒怪奇如^シ刻画、造物偷^テ之出^ラ人間、天呉海若皆嗟惜^ス、肥州太守好事者、愛^ル此劇^ヲ於青娥眉、上有^ニ孤松蟠屈、龍之形、下有^ニ百卉点缀、瑤之姿、安^ニ排^シ玉盆、置^ク清池、日照^シ中峯、生^ス紫煙、浮^レ嵐滴^レ水清、漣、始伝^ハ此石産^{スト}蓬萊、還道蓬萊在^ニ眼前、高軒置酒、車馬來、滿堂賓客皆回^ス頭、池畔石還為^ル寺中有、問誰為^ニ其主、湘雪曾知故太守、問胡名^ク遺愛、太守惠政人不^レ、上人一日三摩

■石色依^ル旧蒼松根、君不^ヤ見、山墮淚碑、載久^シ龜龍剥^ス鱗甲、豈^シ如良岳靈雲上、雲物衛護^ス千百劫、齧、嚼字改

癸未孟秋下澣

槎客竹堂題

寬永二十年朝鮮信使、申濡字君沢、竹堂其号也、此篇其自書、艸法難レ読、今就ニ真跡ニ縮臨シ、併附ニ釈文、按ルニ似三紫煙之下脱ニ一句、然トモ真跡亦如シ是、不可レ考也、姑俟ニ博雅ニ云

松■杜氏識

林道春詩 有序今不録

巨掌劈開華岳胸。飛為ニ一朵玉芙蓉、只看湖口九峯異、何用陳朝三品封、惟石早聞供スルヲ、名山曾愧對スルヲ、周■一、按問遺愛點頭否、須乙レ向ニ生公堂下ニ逢甲、(石名遺愛一故云)

寬永二十年十月中值

羅山夕傾巷叟

林春齋詩

奇石玲瓏淨几間、主人愛見小孱頑、靈雲一朵解レ膚寸、秦岳巖根滿ニ惠山ニ、

寬永癸未孟冬日

春齋向陽子

石川丈山詩并序

湘雪禪翁之遺愛石者、非谷太守細川光尚公之所レ寄スル也、奇形怪状、自然ニシテ而然、惟夫匪ニ造化ノ一尤物ニ邪、可レ謂ニ戒

和尚希代之宝也、慧嶺靈山崑墟層城崢嶸、於凡之間、足以為幽居之諦、奇章之嗜、平泉之戒、袖中東海、心裏蓬萊、可併按之矣、去歲韓使申濡、及東都羅山、其旧齋、品藻斯石、以為潤色、三子者之撰、各探得龍珠、翹余其鱗甲、余又奚言、雖然如言于魏榆、化於穀城者、彼之遠祖、我之同姓、烏乎盆石古之遺愛也、況禪翁之需有所拋、豈用固讓為哉、迺陳二十韻之狂斐、以統貂而已、

一拳太湖石、万古小仇池、水匯連三島、雲晴秀九疑、危峯鋒刃競、峭壁画屏奇、鶴怪巢松樹、龍思潛岸涯、神功加白玉、鬼斧削青磁、徐出四明洞、似遊五岳岐、僊曾在、此、仏日既相移、覓句追蘇軾、留函觀郭熙、苟除三元亮、又被遠公麾、遺愛為僧宝、伝觀無尽期、

三州泉人四明狂客石丈山涉筆於凹凸巷之詩僊堂

杜氏傲書

惠日の山に靈雲軒湘雪と聞ゆる大とこあり細川故越中の大守にしたしめる事久しければをのれをしれるもゆへなからし大守身まかれりける後令嗣光尚の侍従ひとつの盆石をあたへりその久しくもたる具なればにやなづけて遺愛とせり上に五粒の松あり千世のみどりをひさかへて召伯かやとしるといひけんむかしの梢におもほゆる此大とこ島このめる何がしの宮にひとしきこゝろざしありけらしかゝるいはほにかへて見をけん人のちのいろはたあさからずこそはこれがためにつくれるからうたわが国のはかせのみにしもあらずこまの人すら長篇つらねてめですてもあらぬをなをあきたらぬあまりにをのれがつたなきことの葉だにくはへよとなるべしさるはその細川水のあはきまじはりをむすべるよすがとやい

はん裴相公の儘山を韓愈が和し危至能が徐生につけるためしはさらにいひ出づべくもなきをとかくいなふるにいとまあでなん長歌ひとつかいはることしかなり

初しぐれ 　　ふりにし人は 　　長月や 　　ねぎめの枕 　　そはたて、

耳てふ鐘の 　　寺の名に 　　かよへる石に 　　残りける 　　そのいつくしみ

今もなを 　　しのぶあまりに 　　名づけゝん 　　人をしとへば 　　難波江や

よしもあしゝも 　　もろともに 　　ほたつあらざる 　　いほりもる 　　法の師ならし

いでやこの 　　世にながれたる 　　みなもとは 　　かの細川の 　　水のあはの

きえてし後の 　　形見とも 　　今はた見よと 　　あたへけん 　　情もふかき

太山路や 　　柴の戸ぼその 　　明ぐれに 　　あふげばたかく 　　きれはげに

かたき契の 　　たぐひにも 　　千年の松の 　　種しありて 　　をふるいはほは

あまおとめ 　　羽衣ならぬ 　　巻もくの 　　こけの袖もて 　　なでざらめやは

冷泉為景卿

秘書藤監集陰

さゝれ石のなれるいはほの陰たかみむかしをとをくおもひこそすれ

権中納言基理卿

こゝに物あり遺愛石となづくそのいはれは名高き人々の唐やまとの
ことの葉にのせをきたまひぬやつがれもある人にすゝめられて蜂腰
一首をになひ出て

さゞれ石のなれるいはほに生いでし松もちとせの陰をそへつゝ

前参議持豊卿

みやこのひんがし恵日の山なる靈雲院西菴和尚はへだてなき友がきにて侍るかの院にひとつの石あり其かた
ちあやにたへなりこは寛永のむかし肥のくまもとの城主のめでおほしけるをなきあとのかたみにとて院主湘
雪和尚にたうびけるとなんよりて遺愛石となづけられける時に名だゝる人々にからやまとのことの葉をこひ
てつらねてひとまきとなしぬそのこと葉たくみにして春の花のにしきをかざり秋の月のさやかなるにひとし
西庵和上もまたむかしにならひて今の世のひとぐの漢やまとの歌をあつめてさらに一卷となさまくほりし
て予にも和哥よましめらる才のはしかきをはぢおもへばすまひがたくて

ほしうつりものかはれども庭の面のいしのみどりぞよゝにふりせぬ

紹

膺

寛政むつのとし神無月はじめの五日これをしるす